令和８年度　幼児教育研修（年齢別担任研修２歳児・第１回）
「子どもの発達と保育者の関わりについて」
～一人一人の今を大切に受け止め、育ちを支える保育～
日時：令和８年６月２４日（水）１４：４５～１６：４５
会場：足立区役所　庁舎ホール
講師：相模女子大学　学芸学部　子ども教育学科
教授　金元　あゆみ　氏



2歳児の発達の特徴

自己主張



・執着・独占・思いの拡大
・「イヤ」「ダメ」
➔自分の意志で決めたい
・要求を実現するための粘り強さ

象徴機能の発達

・「自分」「自分以外」との出会い、問いかけの連続の中で自己を築く
・ごっこ遊び
➔表象の獲得
➔象徴機能の発達



自己主張は自立に向かうプロセスにとって欠かせない発達の姿



★**2歳児の自己主張は、「自分を認めてほしい」「尊重してほしい」気持ちの表れ**
★「私はどう感じている？何を思っている？どうしてほしい？」と**自分の気持ちに耳を傾け、気づいていく**
★**自分の気持ちを「分かってほしい」**と、言葉・仕草・表情・行為で訴える
★**自分の力で試せる➔意欲が育つ（原動力）➔**表現、言葉、人間関係等、多様な育ちへ
★**自己決定できる喜び、自信、粘り強さ、達成感が自己肯定感へ（健全な自我が育つ）**
★**受け止めてもらえる安心感**に勇気を得ながら外界へと足を踏み出し、**自立へと向かっていく**
（人や自分を信頼し、主体的に生きる力）
★**思い通りにならないもの、ひと、こと➔葛藤➔、関わり方、調整力、自律**

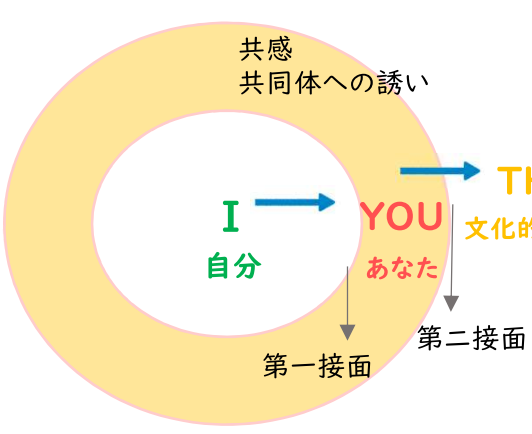




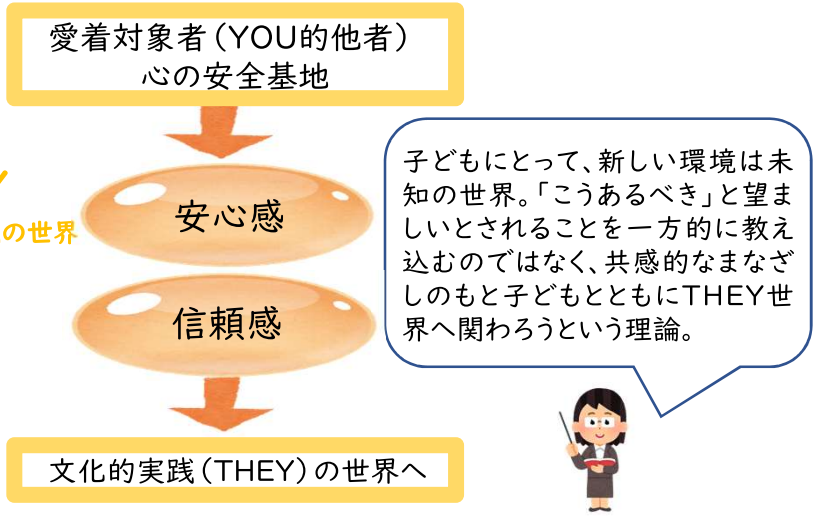
自分とは異なる想い、「やりたいこと」と「できること」の葛藤の中で、思いの伝え方、関わり方を知る
➔他者の世界を知るための大切な一歩。「自分」「自分以外」と出会い、問いかけの連続の中で自己を築く。

自立と依存は相反するもの？

人が世界と関わりをつくりだす時、真ん中に「自分（I）」がいて、一番外側に「社会・文化的に望ましいとされる（ことが実践されている）文化的実践の世界（THEY）」がある。その間をぐるりとドーナッツのように囲んでいるのが「自分（I）に共感的に関わってくれる身近な他者（YOU）」。誰かとのつながりの中で育っていく。



かかわりのドーナッツ
（佐伯胖氏の「ドーナッツ論」）



子ども同士のトラブルは自己主張のぶつかり合い　思いのズレ

トラブルの捉え方

並行遊びが盛んな時期。同じ遊びをしているようでも気持ちは自分が中心。

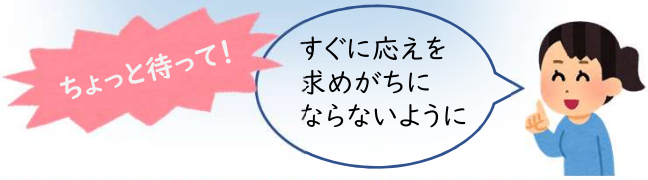
例）物の取り合い

「それ、いいね」と、相手の行為に善さを感じている
➔ポジティブな姿。相手の物や行為を取り入れることで、相手が感じている面白さを知ろうとしている。

どう「関わる」？



●トラブルも育ちとして捉える
➔相手にも気持ちがあることを知る、自分の気持ちの伝え方を知るチャンス
●トラブルを予測しつつ、手が出たりかみつきが起こったりする直前に間に入る
●双方の気持ちを受け止め、代弁する
●どうすればよかったか手立てを伝える
●折り合いを付けられるよう、提案する　など



子どもの気持ちを受け止めるとは？　～保育を見る「3つの目」～

出典：鯨岡峻・鯨岡和子共著（2004）『よくわかる保育心理学』ミネルヴァ書房

子どもの目（子どもの気持ち）
・人の気持ちを「分かったつもり」の怖さ
・見逃したこと、**見えなかったもの**の存在がある ➔「本当の願い・訴え」

調整する目（対話の中で調整）
子どもの思いを「受け止め」つつ「～したいのね」（折り合いをつける）

保育者の目（保育者の気持ち）
・「私の願い・訴え」「こうなってほしい」
➔これだけを強く出さない
・「THEYの世界」のみのまなざしになっていないか？
・「WE世界（IとYOUの世界）」に閉じこもっていないか？

そのための土台は・・・
・納得感・自己決定・他者の思い
・手立てに気付く
・自分の思いを受け止めてもらえる安心感

子どもを見るまなざし
横並びのまなざし
子どもが見ている世界を共にみて、思いを共にしようとするまなざし

DVD『とりかえっこ』を見て、感じたことや気付いたことを共有し合いました

ままごとの『ポット』と『泡だて器』を使って水遊びをしていた男児2人。『ポット』を使っていた男児が、『泡だて器』を使って遊んでいる子の『泡だて器』を取ってしまう。そんな2人の様子を見守っていた保育者の関わり方を見ました。

・取られて叩かれている。自分なら止めに入ってしまうが、2人の思いを代弁している保育者の言葉掛けが、ポジティブな言葉掛けをしながら様子を見守っていた。
・子どもたちは遊び込んでいるが、困った時には、保育者に目線を送っている。
・お互いやっていることは違うが、お互いの遊びをよく見たり聞いたりしている。



研修生の報告書より

★ 2歳児は、自立したい気持ちと甘えたい気持ちの間を行き来しながら成長していることを学んだ。「自分でやりたい」と自己主張する姿が見られる反面、「やって」と保育者に求める姿もあり、どちらも発達に必要な姿であることを理解した。また、安心して甘えられる環境や、自分の思いを表現できる環境が、子どもの心の成長を支えていることを学んだ。子どもの「やってほしい」という依存的な姿や、「自分でやりたい」という自立的な姿も、成長過程の大切な姿として受け止めて関わっていきたい。

★子ども主体の保育と一言に言っても、実際はどのような関わりをすれば良いのか難しい場面が数えきれないほどある。研修で「調整する目」というワードを知り、子どもと保育者の思いを対話させながら共に保育をつくる大切さを学んだ。DVDでは、泡立て器を巡るやりとりの中で、保育者が思いを受け止め代弁する他、子どもたちのやりとりに対して「とりかえっこ」という言葉を用いたことで新たな選択肢が生まれ、納得する姿がみられた。子どもたちのやり取りに仲介していく上で待つことの大切さを感じ、自分の保育にも活かしていきたいと思った。